

その歌声は闇に輝け

歌声は響くもので輝くものではない、という人がいると思います。確かに、それはそうなのですが、目を閉じて耳を傾ければ、歌声が暗闇の中に淡い光彩を放っているかのように感じる事は、あるのではないのでしょうか。

先日（11月15日の夜）、時計台ホールで開かれた北海道高等盲学校の音楽サークルの定期演奏会で、生徒達の歌声に瞑目して耳を傾けていると、私には、彼等の歌声が光を放ちながら体全体を覆ってくるように感じられました。それは多分、演奏会に向けて必死に練習したであろう生徒達の姿が容易に想像出来たからかも知れません。



私はかつて、ある合唱団の団員として合唱を楽しんでいた事がありますが、その経験からいいますと、合唱での指揮者の役割が非常に重要だという事です。声を揃えるためには、指揮者の手の動きをしっかりと見る必要があります。合唱団の歌声が、まるで指揮者の指先から流れ出るように響き渡れば最高です。

練習の時に指揮者からは、「ここでは指揮者を必ず見るように楽譜に印をつけて起きなさい」といった注意をよく受けたものですが、それだけに、目の不自由な生徒達が、声を合わせて合唱する姿を見ると、彼等の必死に練習する姿が目に見えます。

定期演奏会は今回で10回目という節目を迎えたのですが、同時に、高等盲学校の音楽サークルとしては今年が最後の演奏会という事になり、その意味でも記念すべき演奏会となりました。あるいはそのせいかも知れませんが、会場はほぼ満席の状態、会場の熱気は生徒達にも伝わったと思います。

演奏会の主役は、いうまでもなく音楽サークル11名の生徒達です。曲の紹介も生徒が交替で担当したのですが、その際、生徒が点字の台本を普通に話すスピードで読んでいく姿を見て、大したものだと感心しました。

また、音楽サークルの演奏会を支えるために生徒の倍以上の教職員や顧問の方々

がサポートしていましたが、会場で立ち働く先生方の、生徒達を見る目の優しさが印象的でした。

演奏会は、まど・みちお作詞、大田桜子作曲の「うたをうたうとき」に始まり、カスタネットやクラリネット等の楽器を使用してのアンサンブルや合奏と続き、締めくくりはアンジェラ・アキ作詞・作曲による「手紙～拝啓十五の君へ」の合唱でした。彼らが一生懸命に歌う「手紙・・・」を聞きながら、不覚にも涙がこぼれそうになりました。それは、決して年のせいで涙もろくなったからではありません。

生徒達は、「手紙・・・」という歌に何を仮託しているのだろうかと思います。

彼等にも悩みの種はあるはずです。歌詞にあるような「負けそうで、泣きそうで、消えてしまいそう」という思いに駆られる事もあるに違いありません。それでも生徒等は、自分の声を信じて歩こうとしている。彼等の歌声を聴きながら、私はそんな感じを深くしました。

「手紙・・・」の最後の歌詞にあるように、生徒達の未来が明るい光に包まれ、幸せであるように、祈る気持ちで帰途につきました。(塾頭：吉田 洋一)